雑事記（46）　エッセイ集

盛丘　由樹年

今回は次の複数のエッセイにより構成される。ただし、中にはエッセイといえないものが含まれるかもしれない。

・戦争遺跡探訪（17）
・カタカナ用語集 番外編
・地球の回り方

戦争遺跡探訪（17）

またまた、先の戦争に関する遺跡のいくつかを探訪してみた。今回は次の４か所について報告する。。

①衣笠高角砲台跡（神奈川県横須賀市）
2022/6/5,16

衣笠砲台は、ＪＲ衣笠駅から南西方向１ｋｍほどに位置する山（正式な名前は不明）の上にあったという。戦時中、横須賀周辺を空襲から守るための拠点の一つとして造られた。その跡が深い藪の中に残っているという。探訪した先人たちがネット上に報告しており、それをみると、陣地全体の形をとどめた遺跡の一つであり、興味深い。山頂付近にあって、雑木林の中で荒れ果てた状態だけれど、砲台跡や弾薬庫、指令所や兵隊たちの待機所などのコンクリート構造物がいくつか残っていることが、画像で示されていた。

私は２０２２年６月の暑い日に行ってみた。衣笠の住宅街を通り抜けたが、山への登り口がよくわからず、迷った。古い地図にはない立派な道路（横須賀街道のバイパス？）ができており、私はそれを有料自動車道の横浜横須賀道路と誤認してしまった。それで大きく迂回する羽目になった。それでも私が、地元の何人かの高齢者にあたって聞いてみると、彼らは砲台跡を知っていた。「あの辺だ」と教えてくれた。

ようやく山のふもとに来ると、まず、道沿いの畑の中に、兵舎があったという場所にコンクリート遺構のいくつかを見つけることができた。その存在も私は事前に知っていた。この先、期待できそうだった。

ただし「あの辺だ」と言われても、道しるべはないから、山へ入る分岐点を見つけるのは意外と難しかった。横浜横須賀道路を渡る大畑橋の手前で、山に通じているらしい細い道を見つけた。ここまでは、比較的幅の広い道（その昔、軍用道として作られたという）だったが、そこから山のふもとを回り込むように細い道に入ってゆく。細いながらも、確かな踏み跡があった。

衣笠高角砲台の部隊がふもとに設営したという兵舎の遺構。
これは水をためていたものだろう。

しかし、しばらくして倒木に行き当たった。それが数本ではなく、斜面の上から何本も倒れていて、完全に道をふさいでいた。先年の台風でなぎ倒されたものらしい。私はかがみこんで倒木をすり抜けたり、またいだりして進んだが、地面はぬかるみ状態で、私は登山靴を履いていたけれど、それでも歩くのが困難になってきた。ズボンは泥だらけになっていた。倒木の隙間から先を見ると、「ん？　道がない！」

ヤブが生い茂るばかりで、踏み跡がなかった。つまり、この数年の間、先を行く人がいなかったことを意味していた。おそらく他の探訪者もここで断念して引き返していたのだろう。倒木帯を抜けたとしても、道なき道を行かなければならない。深い笹ヤブをこぎながら進んで、目的地にたどり着けない危険もあり、私も断念した。

走破する方法として考えられるのは、草木が枯れる冬に来ることだった。今（２０２３年３月）、その冬が過ぎて、もう春が来ていた。いつ行けることやら、わからなくなった。

実は道に迷ったりして、衣笠に今まで私は２回も行った。他にアプローチするルートを探して、衣笠城址

周辺をうろついていると、ほんとの不審者としてまちがわれたから、苦い経験となった。私有地に入ってしまった私が悪い。でもチャンスがあれば、もう一度行ってみたい。

②横浜海軍航空隊跡（神奈川県横浜市金沢区）

2023/3/20

戦前、横浜海軍航空隊は、飛行艇部隊として編成された。飛行艇は滑走路を必要とせず、水面を走って離着陸できるから、便利だった。偵察や哨戒のために、南洋方面での任務にあたった。物資の輸送用にも転用された。

その機種として九式式飛行艇、二式飛行艇（二式大艇）といわれる４発のエンジンを備えた大型の飛行艇があった。それらは４００機ほど作られたというが、終戦時には、ここで稼働可能なものは３機だけになっていという。水上用としては、ほかに、車輪の代わりに大きなフロートを付けた単発エンジンの水上戦闘機があった。

戦後、二式飛行艇の後継機が求められ、日本の航空機製造に関係してきた数社（生き残り的な企業）が協力し、新明和工業株式会社が中心となって、海上自衛隊用に機体を開発をしてきた。対潜哨戒機としてＰＳ－１、救難飛行艇として、水陸両用（水面にも陸上の滑走路にも離着陸できる）のＵＳ－１ＡやＵＳ－２を開発した。時には事故も経験しながら、それぞれ改良が加えられてきた。今でもＵＳ－２が現役として飛行している。

大型の飛行艇は、日本の航空産業の数少ない誇るべき技術の一つとして継承されている。軍事以外の用途も考えられ、世界的に需要があるところであり、他国からの引き合いがあるけれど、コストが高いなどの事情があって受注には至っていない。

さて３月２０日（月）サクラのたよりが聞こえてきてきた時節、咲き始めの花見を兼ねて、その基地跡があるという三浦半島の富岡（とみおか）に行ってみた。横須賀方面だけでなく、根岸湾の周辺にも軍事基地や軍事工場があったわけだ。

私は横浜に出て、横浜駅から京急に乗り、京急富岡駅で降りた。駅から富岡八幡公園を通って、目的の「県警第一機動隊」を目指す。富岡八幡宮へ行く案内に従って、歩いてゆく。この際、富岡八幡宮に寄って拝観する。それほど大きな神社ではないにしても、鎌倉の

鶴岡八幡宮とペアで創建されたという神社であり、なかなかの由緒があることを知った。

平地に伸びる富岡八幡公園は、かつては海岸線に面した軍用地だったらしく、ところどころコンクリートの土台や、敷石が転がっていた。中にあった砂場のような円形のレンガ造りのものは、砲座跡ではないかと思いながら、興味深く私は歩いた。鉄網の塀で囲われた立ち入り禁止の斜面部分には、地下に通じる扉が数か所見えていた。これらは空襲の際に逃げ込むための避難壕だろう。

この周辺は、今では埋め立てが進んだりして、団地や学校が建ち並び、かなりベッドタウン化している地域だ。軍事基地の中にあった丘陵部は、自然豊かな公園になっている。

「神奈川県警第一機動隊」の大きな倉庫が見えてきた。道路に沿って、横に長い（約１５０ｍ）大きな建屋だ。もとは横浜海軍航空隊が持っていた飛行艇の格納庫だった。第三格納庫といわれていたもので、これが唯一現存する建屋だ。ここに数機の大型飛行艇を格納していたという。５、６機が入る大きさだ。高さが４階建てのビルほどあり、縦方向から見ると、三角の屋根が三つ並んでいる。

ふと疑問に思うのは、こんな大きなものがアメリカ軍の空爆の対象にされなかったことだ。彼らは民家を焼き払うことに専念していた。

旧・横浜海軍航空隊の格納庫
神奈川県警第一機動隊の敷地内に現存

県警第一機動隊が航空隊基地の一区画を引き継いでいる。側面に沿って歩いていると、何やら、奥のほうから低い叫び声が聞こえてきていた。号令による声出

しだろう。デモ隊制圧などのために、彼らは日ごろから訓練し、身体も鍛えているのだろう。

機動隊といえば、私などはその昔（１９６０年代）、学生らが国会前などで体を張ってデモを行なったときに、力づくで阻止しようとした機動隊との激しいバトルがあったことを記憶する。バトルといっても、かなり一方的な仕打ちだった。機動隊は重装備であり、防具や専用の武具を持っていた。その頑健な機動隊が、女性を含むデモ隊に襲いかかる構図が多数見られた。

その頃、報道されたモノクロ映像（カラーだったら、さらに生々しい）のいくつかが目に浮かぶ。警棒で頭を殴られ、スイカの縞のように、頭から血を流して、逃げまどう学生らの姿だった。デモのためにはヘルメットが必需品になった時代だ。

警棒でどつかれた人もいて、それで亡くなったという話がある。遺体の腹部に棒状のもので突かれた跡があったというから、信ぴょう性が高い。公式には、デモ隊の中で自分でつまづいて倒れたために、踏まれて死んだことにされた。

門のところに警官が立っていた。構内に入って、倉庫を見学したいと申し出る厚かましさは私にはなかった。私など、一目で不審者と思われてしまいそうだ。

門の近くで写真を撮ることに関しては、見とがめられなかった。このとき私はヘルメットをかぶっていなかったから、内心はビクビク……（半分冗談）。

小高い丘の富岡総合公園周辺の壁にも、地下に通じる入り口が等間隔にみられる。ただし、ブロックで隙間なく塞がれている。

なお、ここには横浜海軍航空隊の門柱跡（これも見どころの一つ）があると聞いていたのだが、私は見逃してしまった。それはあきらめよう。

この日私は駅に戻ってから、逗子を経由して鎌倉に向かった。

その京急の車両の中で、となりの座席に座ったのが屈強そうなヤンキー男とグラマラスな女のカップルだった。彼らは、神武寺駅で降りた。そこにはアメリカ軍の「池子キャンプ」がある。彼らは夫婦だろうけど、男は女連れで軍務についているわけだ。

③佐介山高角砲台跡（神奈川県鎌倉市）2023/3/20

鎌倉は平日とはいえ、観光客でにぎわっていた。私は、その一人に紛れ込み、西口から佐助方面に歩いて

行った。高角砲台跡を見るためだった。
鎌倉の佐介山は、佐助山とも記されたらしいが、もう地図には載っていない。この高角砲台は、首都圏の防空施設の一環として造られたものだ。
こういった防空陣地は、当時アメリカ軍の空からの偵察で、しっかり把握されていた。そんな航空写真が公開され、ネット情報で示されている。
この周辺では、佐助稲荷神社が有名だ。私が若いころ、寮生たちのリクリエーションとして葛原岡公園（これも最近の地図には載っていない）とやらに行った折に、キツネにたぶらかされたように、一人で訪れたことがあった。その頃は、今のように観光地化されていなかったと記憶している。
赤い鳥居がずらりと並ぶ中、坂を上がっていくと、やがて真新しい造りの本殿が見えた。もう昔の印象とはだいぶ異なる。
私は佐助稲荷を形だけお参りしてから、大仏ハイキングコースに出るつもりでいた。目的のところは、佐助稲荷の西側にある山であり、大仏ハイキングコースを5分ほど歩けば、分岐点に出るはずだった。しかし、佐助稲荷からハイキングコースに出るルートは、倒木のために通行止めになっていた。来た道を戻り、長谷トンネルのところから上った。かなり迂回する形になったが、やむを得ない。
大仏ハイキングコースでは、外国人観光客のグループが軽装で歩いているのが目立った。
さて、そろそろ佐介山へ行く分岐点があるはずだったが、見つからなかった。その代わり、桔梗山（標高１２３ｍ）への登山ルートを示す仮設的な目印があるだけだった。ためしに、そのルートに入っていた。道は細いが、土が踏み固められており、「けものみち」でないことが安心だった。私は、佐介山とは軍用につけられた仮名であり、地元では桔梗山と呼ばれているものではないか、という疑いをもった。
結果的に、それは確信に変わった。低山ながら、桔梗山の山頂には、開けた平地があり、空に向けて砲門を向けるのにちょうどよさそうな地形をしている。竹やぶなどが刈り払われて積まれており、最小限、人の手が入っているようだ（鎌倉市の管理下にあるらしい）。
ここに、聞いていた情報通り、砲台の基礎造りのための縦穴らしい窪みがあった。ただし、コンクリート構造物などは何も残っていない。説明版もないから、ここに「佐介山高角砲台」があったことは、知る由もないところだ。窪みがあるだけでは確証がつかめず、

腑に落ちないところが少しあった。

佐介山高角砲台跡らしい窪み
桔梗山頂付近で

山を下りる際、「茶室跡」を指し示す簡素な案内プレートに気づいた。それに従い、きまぐれな私はそこに向かった。桔梗山の山頂からかなり西側に下ったところに、それがあった。正確に言えば「野村総研の茶室跡」だ。

タイル張りの広い床面が残されている。茶室にしては広すぎるだろう。大き目の吾妻屋(あづまや)が建っていた可能性はあるけれど、どこからみても、私にはこれが茶室には思えなかった。

ここは桔梗山の中腹に位置する。さらに下ったところに、楕円形のグランドがあり、さらに２００メートルほど離れた平地に野村総合研究所のビル跡が見える。

野村総研の茶室跡
入り口の階段を上がると、タイル床の平面がある

後に知ったことだが、この辺一帯（鎌倉市梶原）に、

人里離れた山の中に野村総研の本社建屋があった。野村総研は１９６５年から１９８７年までここを本社として大勢の人が出入りしていたという。１９８７年といえば、バブル景気でわいた時期だ。ここでは手狭になったので、他所（東京都千代田区）に移転してしまったという。その後しばらく「鎌倉研究センター」として所有していた。

２００１年１２月になって野村総研は好意的に鎌倉市に譲渡した。市のほうでも、この施設を再利用することを考えたらしいが、立地的に、なかなかの好環境でありながらも、１７万平方メートルというまとまった土地を利用する計画がまとまらず、長年それらを放置してきた。いまでは、施設の大きなオフィスビルは破損が生じ、廃墟同然になっている。

近頃、結局ゴミの処理施設に建て直すという、小耳にはさんだ（不確かな）情報がある。ゴミ処理施設にするといえば、どこでも周辺住民に反対されるに決まっているのだ。それを押し切って、計画思惑通り進めるのが市の手腕のみせどころだろう。（広言しないのも、手腕の一つ？）

さて、取り壊された「茶室」について、私が余計な推理を働かせると、ここにはもともと軍の関連施設があったのではないか。

高角砲を据え付けて部隊が運用するためには、他に弾薬庫や兵舎などがなければならない。グランドまで、軍用道路らしく幅広の道路が作られ、それから山頂までの細い道の中間に兵舎が作られた、と推測する。（ただし、当時の航空写真では明確ではない）

その兵舎を野村総研が改造して「茶室」に使っていた。それも老朽化したので取り壊したものと考えられる。もしそれならば「茶室跡」というより「兵舎跡」としたい。

この日、さらに私は大仏ハイキングコースに戻ってから、バス通りを歩き、鎌倉山の夫婦池に向かった。体力的にかなりへたっていたが、欲張って次の目的地とした。

しかし、地図をろくに見ずに歩いて行った私は、別な方向に迷いこみ（またキツネのせい？）、日が傾いてきたので歩くのをやめてバスで帰ることにした。そのバスは大仏近くのバス停で観光客で満員になった。バスの運転手が「次のバスを利用してください」とアナウンスする始末だ。道路も渋滞していたから、私には、疲れと不快な気分が相乗した。

④鎌倉山夫婦池公園の防空壕跡（神奈川県鎌倉市）

2023/3/27

日を改めて、鎌倉山地区に行ってみた。ここには、防空壕が残っているという。

３月２７日（月）大船駅からの湘南モノレールを利用して湘南深沢駅で降りてから、歩いて行った。その夫婦池公園まで２０分かかると聞いていた。バスを利用しないルートでは最短だそうだ。地図上では、次の西鎌倉駅にも、おなじくらいの距離だ。そこから江ノ島に出るのにちょうどよい。

道は曲がりながら、上り下りがあるから、汗ばむほどの運動になる。この日も曇り空ながら、桜の季節だった。谷筋を下っていくとやがて池が見えた。それほど大きな池ではなく、昔はため池だったそうだ。池を中心にすり鉢状の斜面には樹木が生い茂る。ところどころから水が湧き出し、池に流れ込んでいる。広がった住宅地の中に貴重な里山風景を作り出している。

案内板に「防空壕」と書かれている。その付近は立ち入り禁止区域になっている。でも、入り口近くまで行ける。

この防空壕は、どの部隊が造成したか、記録に残っていないという。全容が解明されていない。わかっている部分の地下構造が図示されているのを見ると、防空壕というより「地下陣地」として造られたものだろう、と私は考える。待ち伏せのために隠れる陣地であり、敵兵が近づいてきたら攻撃する。敵軍がこの辺（相模湾）に上陸し、進軍してくることを想定していたものだろう。

夫婦池公園の防空壕跡
土を掘って作られたもの。
柵の前で不審者が見つめていた。

この後、私は西鎌倉駅に出て、江ノ島に向かった。

④江ノ島の地下陣地跡（神奈川県藤沢市）

2023/3/27

江ノ島は観光地らしく、平日だというのに人出が多かった。江ノ島大橋を渡って商店街を進むと間もなく、右に折れる細い路地を通り抜ける。すると、海岸に出る。江之浦だ。この海岸は磯遊びにちょうど良い、穴場的なところだ。しかし、よく見ると、陸側の斜面にいくつか横穴が口を開けている。

戦争中に作られたとされる。江ノ島は防衛拠点として、島全体のあちこちに洞窟陣地が築かれた。

江之浦も例外ではなく、確かに人工的に作られた横穴がいくつかある。

それらを見て回ってから、島の西側から東側に移動した。やはり陣地跡を探すためだ。江ノ島観光は省略した。

「県立かながわ女性センター」を目標にして歩いてみたが、その大きな建屋があとかたもなく、さびれたような広い駐車場があるだけになっていたことに驚かされた。

江之浦の横穴の一つ
左の壁面は観光施設のもので、無関係。

近頃の報道（毎日新聞朝刊 2023/4/2）によると、男女共同参画推進の拠点として１９８２～２０１４年に使用されていたものだが、閉鎖された。更地にされた後は、一時的に駐車場として使われているが、広すぎる（主要な観光ルートから外れているため、ここは閑散としている）。今後どうするか、ここでもまだ決まっていない。

その近くの壁面に、岩石をくりぬいて作った地下陣に通じる穴があると聞いていたのだが、それは見つけられなかった。その中に入るつもりはなかったけれど。

あきらめの悪い私は海岸に出て、回り込んで探した。波で浸食された自然の洞穴はいくつかあったが、人工的に作られた横穴は見つけられなかった。それでも海岸の岩場には、軍事施設の土台のようなコンクリート構造物が残っていたから、それなりに興味深い海岸だった。

しばらく歩くと、崖の上部に、コンクリート造りの要塞らしいものを見つけた。これがあるとは知らなかった。事前の情報になかったから、新しく発見した気分だ。。

その構造物には、銃眼らしい穴がいくつか開(あ)いている。これは海に面し、一望できる場所にある。海岸一帯を監視するための「見張り台」的な施設だろう、と私はみた。

私は、実態を確かめるために、海岸から直接上がるのは無理だから(急こう配の崖の３０ｍほど上にある)、迂回して、奥津宮への参詣の道に上がってその場所に行こうとしたが、その近くに店舗があったり、柵で仕切られていたりして、目星をつけた崖際に近づくことができなかった。

江ノ島の要塞跡らしい構造物
海岸に面した斜面の上部にある。

ちなみに江ノ島には、ここから近い崖の上に宿泊施設の廃墟があり、一つの「名物」となっているのだが、それとは別だ。

カタカナ用語集 番外編

書を読んだり、人の発言を聞いていたりすると、聞きなれないカタカナ用語が出てくることがある。それらは外国に起源を持つ語や専門用語だったりするので、ひっかかる。それらをよく理解していないという懸念があったり、意味がよくわからないためだったりするから、そんなとき私は、興味半分に辞書を引いて調べてみたくなる。

カタカナ用語を多用する人は、学のあるところをひけらかしたいのかもしれないし、あるいはそれを使っている本人がその言葉をよく理解せず、対応する訳語を知らないのかもしれない。そもそも人の話などは大したことを言っていないのだから、そんな用語など、聞き流してもいいのかもしれない。

でも、できれば意味を知っておきたい。知っていて損はないだろう。そんな言葉を使いこなしたら、少々鼻が高くなるかもしれない。しかし、うろ覚えに使い、表現が不適切であったりしたら、「コイツ、言葉の本質を理解していないで使っているな」と見下されたりして……。

ただし、そういう人に対して、むきになって「ちがう！」と頭っから否定したりしてはいけない。なぜなら、用語には方言（放言？）があって、まちがいとは言い切れないところがあるし、一つの意味に限定しにくいところがある。議論の時、ある学者のように、いちいち言葉尻（ことばじり）をとらえて、「**ちがう！**」を連発したら、議論や会話が進まないし、あるいは議論の本筋をずらしてしまうから、やっかいだ。（彼らは言葉を正確に使いたいのかもしれなし、正しいことを言っているのだろうが、性格が悪い。相手のミスを聞き逃さず、それを咎（とが）める。その口調はたいてい攻撃的だ。自分の記憶や考えが常に正しいと思っているタイプなのだ）

性格の良い人は〈コイツはまちがった言葉の使い方をしている。たぶん、ああ言いたいんだろうな〉ぐらいに心の中で考えて、相手の失言や失語を聞きながす。

ともあれ、ここでは私が気になった言葉、主に哲学用語的なものをとりあげる。詳細な言葉にこだわるわけではないが、漢語になっているものならともかく、カタカナ語は語感から判断できず、意味の解釈が難しいし、意味深いところがある。

それらを厳密に、専門用語を交えて定義すると、逆に意味不明になりがちなので、私流の解釈で、解説し

てみたい。ここにミスリードがあったとしても、聞き流してほしい。以下の言葉の多くには、起源の古いものがあり、時代によって変わり、あるいは人によって別の意味で使われることがあるので、注意を要す。カタカナ表記にも差異が生じることがある。

（あいうえお順）

アイロニー

皮肉と訳される。当てこすりのような陰険な言い方をさす場合もある。この言葉の解釈・用法は、ソクラテスなど哲学者たちの間でいろいろ取りざたされている。彼は知らないふりして相手に質問をぶつけた。（相手がまちがえたり、答えに詰まったりしたら、冷笑したりして……）

皮肉には、侮蔑の意が含まれるし、建前とうらはらの冷ややかな現実があるときに、用いられる。からかうような攻撃性があるにしても、おおむね、皮肉は機知（ウィット）に富んでいるとして、社会的におもしろがられることが多い。

なお、似た意味の英単語に次があり、簡単な訳を添える。

サタイア（ｓａｔｉｒｅ）社会的風刺、シニカル（ｃｙｎｉｃａｌ）皮肉な、冷笑的な、サーカスティック（ｓａｒｃａｓｔｉｃ）いやみになりそうな

アウタルキー（ａｕｔａｒｋｙ）

自給自足の経済を目指す。他国からの輸入に頼らない。

アナロジー

「似ていること」が語源。それぞれの類似点を見出し、関係づける。脈絡をつけたりすること。ときには、こじつけになる。

アプリオリ

先天的に備わっている所作や対応方法など。証明が不要な原理原則をいうことがある。

アンチテーゼ

「テーゼ」は命題のこと。言い分という意味に解せる。アンチテーゼを直訳すると反命題だ。ある命題に対して、それを否定する・対抗する命題をアンチテーゼという。

アンビバレント／アンビバレンス（形容詞／名詞）

二面的／二面性。背反する二つの特性を合わせ持つ。例えば、功罪の両面を持つもの。役に立つけれど、危険な面があるというもの。心の中で対立

する葛藤をいう場合もある。

イグジスト／イグジステント／イグジステンス（動詞／形容詞／名詞）

存在、実存、現存。

神の存在や人（自分）の存在については、昔から論考されてきたことだ。釈迦が「天上天下唯我独尊」と言ったことが、その嚆矢（こうし）かもしれない。彼は自分の存在が一番偉いのだと言う。

１７世紀前半の人デカルトの言葉「われ思う、故（ゆえ）にわれあり」にも関係する。近代、１９世紀前半にはキルケゴールが、神よりも人間主体の実存主義を提唱した。人間はそれぞれの人生をおのれの責任において生きぬくことだと。〈それらは自己責任論である〉と私は理解した。

自と他の区分について一考察すると、自分が思い通りに、自由に動かせる範囲が「自」であり、その範囲外にあるのが「他」だろう。集団になると、社会性が生じ、主従の関係や役割分担があり、統合的な「集合体」となる。単独の「我（われ）」から、集団の一員として「我々（われわれ）」という存在になる。同じ集団の他人は自分の分身である可能性がある。

イデア

理性によって認識される本質。観念、理念の意に用いられるようになる。

イデオロギー

主義。社会・経済・政治において、それぞれに方式や形態があり、何を重視するかによって考え方が分かれる。例えば、社会主義や資本主義。特に、国家体制のあり方を語ることは、考えを異にする人たちから「偏向思想、偏った観念、空理空論」とみなされるから、注意を要す。

イルージョン

幻（まぼろし）、幻想、幻滅。

「人生は幻だ」（Life is only illusion.）などと言う人は、幻ばかり見て、現実を見ていなかった人かもしれない。

江藤淳（1933～1999）は、ある本で「ヒトは幻滅をかみしめてオトナになる」と語っていた。似たような意味で、私が追記すると「ヒトは幻滅によって何かを悟る」

エゴ（語源はラテン語で「私」の意）

「うぬぼれ、自分本位」の意とともに、「自我」の意がある。セルフも自我を意味する。

自我とは、知能を生物に備わった、心の複合シス

テムだろう。脳機能を中心に、意識が働く。自我の中には本能的な感性と理知的な理性があって、両者が影響しあって思考する。つまり、状況を把握・認識し、自分の行動を決める、あるいは物事の特性・仕組みを解析する。感性と理性は対立しやすく、どちらが「本当の自分」か、わからなくなることがある。もちろん、賢いのは理性のほうだろうが、幼少期においては未発達だから、感性がそれを補う。

エトス／エートス

気風・性質。規範となる考え方、慣習となっている常識的行動。この語に対比されるものとして、パトスが挙げられる。

エントロピー

熱が高いところから低いところへ浸透していくように、形が崩れたり、交じりあったりすることを、エントロピーが増大するという。これは、時間がたてば「形あるものは必ず壊れる」という原則に立っている。

生物においても、この原則から逃れられず、形が崩れるから、それを修復していくか、あるいは新規に形作っていく必要がある（近年、福岡伸一氏がこれを「動的平衡」と説いている）。

生物の個々の細胞にあるＤＮＡ（遺伝情報）が、年月を経ることで、ところどころ傷つく。細胞の複製の際にもコピーミスが起きる。複製を繰り返せば、そのミスが蓄積される。修復する機能があるにしても万全ではない。それを初期化するプロセスが受精だろう。

オーセンティック（ａｕｔｈｅｎｔｉｃ）

真の、本物の、本人の。

オーストリッチ

現実逃避の人をダチョウに例える。ダチョウは、地面の小さな穴に頭だけ隠すことがあるらしい。

オマージュ（hommage フランス語）

フランス語で、秀でた人などを尊敬・敬愛していることをいう。特に芸術・芸能関係の人が駆け出しの時、高名作家の作品を模範としてそっくりな作品（習作）を作る。模写だと断らずに、「自分が制作した作品」だといってしまうと、それは贋作（がんさく）・剽窃（ひょうせつ）とみなされる。一般に、作家やデザイナー、アーティストは、意識しなくても、他の人のものに似た作品を作ってしまうことが、よくあることなので、そのときは「偉大な作家へのオマ

ージュだ」と言い訳しよう。
ちなみに、同じような意味の英語には、ホミジ（homage）、リスペスト（respect）、トリビュート（tribute）、エスティーム（esteem）、アドマイア（admire）、ホナー（honor）がある。これらを使い分けできれば、すばらしい。

ガイア／ガイア仮説
ガイアは、もともとはギリシャ神話に出てくる大地の神の名だが、地球を意味するようになる。ガイア仮説とは、イギリスの科学者Ｊ・Ｅ・ラブロックが１９７２年に発表したもので、地球のような惑星を一個の生命体とみなす。一般には７９年に刊行された著書「地球生命圏−ガイアの科学」で知られるようになった。彼は〈地球上のあらゆる生き物は、地球に寄生する微少生物だ〉とする。世界中の主な環境破壊や生物絶滅を見てきたＮＨＫ取材班は〈地球環境をむしばむ現代人は、がん細胞のようだ〉と表現した。
なお、民放のテレビ番組「ガイアの夜明け」は、経済・産業関連の革新的な事業例を紹介している。

カオス
一般的に知られている言葉で、混沌・混乱の意味だ。この反対語で、秩序を意味するのがコスモスであり、この宇宙をさす言葉になっている。それは調和の取れた世界を意味するが、現実の地球はかなりカオス的になっている。

カタルシス
浄化・消散。あるものを得たり接したりすることで自分のストレスが解消されたり、たまっていたものが外に出されたりする。例えば、他人の不幸を見て、自分が安らぐことがあり、他人の不幸が自分にとって。カタルシスになりうる。

カルマ［梵語］
業（ごう）と訳される。因果応報の元になる行為。一人の業によって未来世界が変わりえるという。

コヒーレント（コヒアレント）
首尾一貫の、整合性がある。
物理学的に、光の位相がそろっている。

コペルニクス的転回
コペルニクス（1473〜1543）はポーランドの天文学者で、１５４３年に著書『天球の回転について』で地動説（コペルニクス体系）を唱えた。それまでの考え方をがらりと変えること。
人々から抵抗や反発を受けやすい。特に、精密な

観測ができなかった当時、観測データとの矛盾点があったし、地球は動いていないという天動説にもそれなりの理論的整合性があった（2世紀のギリシャ人・プトレマイオスの説に合理性があった）。コペルニクスの説は、後年、ガリレオ（1564～1642）、ケプラー、ニュートンらによって証明され、18世紀後半になって人々に受け入れられた。

コンペテント／コンペテンス［competent 形容詞／competence 名詞］

能力、資格。社会的にあらゆる分野において、能力を証明するもの、つまり資格や認定が重視される。資格のあるなしで、有能かどうかが判断され、決定的に格差が生じる。

資格を持たない人は、社会的に除外されてしまうから、厳しい。ちなみにこれに否定的な言葉もよく使われる。インコンペテント／インコンペテンスだ。「無能な、役立たず」という意味になる。

コンプライアンス

法律や基準に準じていること。近頃の企業でコンプライアンス順守が叫ばれている。成果を上げるために必死になると、従業員がつい忘れてしまう（あるいは無視する）ことがある。順守してばかりいると、企業にしても成果があげられないから、〈形だけでも順守するふりをせよ〉というのがその本音かもしれない。

シュレーディンガーの猫

物理学者シュレーディンガーが、量子のふるまいを猫に例えて、説明した。そこに存在がわかっていて、捕まえようと近づくと、さっと姿を消して、別なところにいる。捕まえようとしても、捕まえられないものを「シュレーディンガーの猫」という。

シンギュラリティ（singularity）

まれにみる出来事、あるいは思いがけないことに遭遇したりして、新しい発見をすること。つまり、まぐれ当たりのことだ。それがたまたまであっても、それに遭遇するための努力や資質がその人にあったから、と考えられる。スポーツ界などで使われる〈まぐれも実力のうち〉ということわざに通じる。

ステイグマ

原意は瘢痕（はんこん）。

ある集団に付けられた社会的な悪評・汚名。

ストイック／ストイシズム

自制や克己を重んじること。目標達成のためには自分を統制する必要があるし、禁欲的にならざるをえない。なお、目的達成したら、堕落してしまう人もいる。似たような言葉で、asceticismがある。

スノビズム
上級階級への志向。上級を気取る。

スピンオフ
派生した副産物。回っているものから飛び出るイメージ。作品の本筋から派生したストーリーを別の作品にすれば、それをスピンオフ作品という。あるいは企業で、本業から派生した副次的事業。一人立ちできそうなら、別会社化する傾向がある。

タナトス
攻撃的本能。フロイトは生の本能(エロス)と死の本能(タナトス)の2大本能を仮定した。自衛は正当防衛として、正当化されることがある。「コノヤロー、**倍返しだ！**」と怒りまくるケースでは、タナトスが理性を超越する。人間の本能を呼び覚ましての〈正義の鉄拳〉かもしれないが、過剰に仕返ししてはいけない。

テーゼ（These ドイツ語）
本題の主張。主題。活動の基本方針。闘争の方針。

デジャブ
既視感と訳される。以前経験していたかのような錯覚を覚えること。どこかで見知った、隠れた記憶が呼び覚まされたのかもしれない。ただし、前世の記憶までよみがえることはないだろう。

トラウマ
傷のこと。特に、恐怖体験から来る場合、心の中の、癒されない傷となる。
ＰＴＳＤ（post-traumatic stress disorder）の症状をきたすことがある。

ドグマ／セントラルドグマ
ドグマは宗教の基本的な教義・教条をいう。
セントラルドグマといえば、生物学において、細胞の中で遺伝情報が「ＤＮＡ→ＲＮＡ→蛋白質」の順に伝達・展開されることをいう。

ドクサ
臆測。思い込み、根拠のない主張。立証されていない仮説。そんな仮説を嫌って、まったく聞く耳を持たない人もいるが、そんな説にも真実が含まれているかもしれない。

ニヒリズム

既存の価値を認めない主義。これが特に、１９世紀後半のロシアでは既存の体制を暴力的手段で破壊・殺戮して〈新しい政府を建設しよう〉という革命思想（暴力革命主義）の原点になったとされる。既存の体制はなかなか壊れないにしても、荒っぽい手段を正当化してしまうのはどうだろうか。

バタフライエフェクト

小さな動きがきっかけとなり、大きな波となって効果を発揮すること。アメリカの気象学者Ｅ．Ｎ．ローレンツが１９７２年に「南米のチョウの小さな羽ばたきがテキサスの大きな竜巻となりうる」と言い出したことから。

日本人には「風が吹けば桶屋（おけや）が儲かる」と言うほうが分かりやすいだろう。

パトス／ペーソス

（パトスとペーソスは、英語では同じ言葉（pathos）なのでややこしい）

パトスは情熱。心情をいい、衝動的行動を呼び覚ます。ペーソスといえば、哀愁となる。

パラダイム／パラダイムシフト

基礎的な枠組みや前提条件となる規範をパラダイムといい、この方式を変えることをパラダイムシフト（あるいはパラダイム転換）という。

一例として、最近の新聞記事に、現政権は「安倍パラダイム」を脱却できるかとする議論があった。安倍元首相が推し進めた政治姿勢や経済政策「アベノミクス」などの見直しが求められていた。

ヒエラルキー／ヒエラルヒー（hierarchy）

階級組織，階層制度をいう。集団や組織においては、平等はあり得ず、クラス分けされ、格差がつけられる。英語の発音では、ハイアラーキになる。

プルーストの魔術

プルースト（1871～1922）はその長編小説『失われた時を求めて』で、「私」が過去にさかのぼり、過去を再生するかのように自伝的経験や見聞を語っている。終わりのところで現代にもどるから、時間を超越している。

ペルソナ

人格、人物像。主体性を持つ自己。

マーケッティング用語としては、個人ユーザーを指し、商品を売り込むために〈対象となる客層〉をいう。

ホメオスタシス

恒常性。生物の体内で、心身の状態を一定に保つ

仕組み。もしも一定に保てず、ある一線を下回るなら、病的になり、さらには死に至る。

マウント

登る、上がる、乗るの意。

最近、人間関係で、上位に立つ、あるいは主導権をとることをいう。つまり、でしゃばること。他人の上に乗るイメージがあるので、私的には使いづらい言葉だ。

ミーイズム

オレ流の生き方。反戦活動などの、政治や社会問題に関心がなく、自己中心的に考えること。ミーは自分を意味している。

ミーツー

人まね的な。模倣。

モナドと予定調和

ライプニッツ（1646〜1716）が唱えた宇宙論。宇宙は独立したモナドから成り立っているが、あらかじめそれぞれのモナドが調和するように作られているとする。

ラディカル（ラジカル）

過激な。改革などを急進的に推し進めること。変化を望まない人たちの抵抗にあうかもしれない。ラディカルには〈根本的〉や〈不安定〉の意味もある。

ルサンチマン

怨恨・憎悪・嫉妬などの感情が積もっていること。他人に加害したことはすぐ忘れるが、自分が被害にあったことは忘れずに、いつまでも根に思う。

ルビコン川を渡る

ルビコン川はイタリアの中部を流れる川。古代ローマ時代、カエサルがライバルのポンペイウスを打倒するために「さいは投げられた」と言って軍を率いてこの川を渡った。

重大な一線を超えるときに、表現する言葉。その結果がどうなるかはわからないのに、仕掛けるのが人間らしい？

レゾンデートル（レーゾンデートル）

存在理由。だいたいにおいて事物や人の存在には、職能的な価値は別として、大した理由がない。「そこに山があるから、のぼる」程度の理由だろう。

他の人が自分をどう評価するかはともかく、自分は自分で、自分の存在をあつかましく認めたい。

先人たちの言葉を思い出しながら。

たとえば、就職試験で「不採用」になったり（一

度不採用になると、連続的に不採用になる傾向がある）、だれか親しい人に「テメーなど要らん！出て行け！」と罵倒されたりしても、「役立たずめ！」「キサマなど死んでしまえ！」とののしられたとしても、〈テメーらにオレの価値がわかるものか！〉と心の中で叫びたい。

〈オレは優秀な人間ではないにしても、テメーよりましだ〉と思うのが、ささやかな自尊心だろう。

ロゴス

語源は言語。論理、理性、理念の意味をもつ。

宗教においては、神の言葉とされる。紀元前のユダヤ人哲学者フィロンは、すべてを超越した神の意を伝えるものとしてロゴスを当てた。

神意（providence ともいう）をヒトが理解するのは、そうとう難しそうだが、太古の昔から、怪しげな人やもっともらしい人がいい加減なことを語ってきた。神は万能らしいから、特定の人物にその教えや摂理を語らせることができるのかもしれない。それならば、そんな複数の人が同じことを語らなければならないし、教義などの解釈も一致していなければならない。特に一神教の場合、宗派に分かれるのは、人びとが勝手にその言葉を解釈しているからだろう。

「オレは神だ、神に一番近い人間だ、オレは神の声を聴いた、ご神託を受けた」などと自称する人物が一番怪しい。あるいは、その取り巻き連中が、彼らを師として仰ぎ奉り、さらに神の化身（権現）・預言者・聖人・尊師などと、まつりあげることで、それを頂点とした教団が作られる。組織として確立すれば、権威と地位と実益の元になる。

参考資料

『２００１年哲学の旅』池田晶子 編・著

『２１世紀は警告する１～６』ＮＨＫ取材班

『広辞苑』

地球の回り方

地球と太陽に関して、いくつかの事象を数学的に考察してみる。基本的なことながら、自分自身、理解しておきたい内容だ。

① ２地点間の距離計算

場所を表すのに、経度・緯度で示すことが一般的になりつつある。それが地図上のどの地点か、よくわかるようになっている。複雑に設定された住所･番地で場所を探すより、今では簡単なことかもしれない。ただし、階層のある高層ビルでは、同じ経度・緯度になってしまい、混同するかもしれない。

二つの地点、ＡとＢの経度･緯度から、その間の距離ｘが計算できるので、説明しよう。

東経、北緯　（小数点以下は削除）

たとえば、東京は、１４０、３５

北海道の根室は、１４５、４３

経度･緯度は、地球の中心を基点として、角度を表しているから、二つの地点の経度･緯度の差分ａとｂは、それぞれ、約５と８となる。

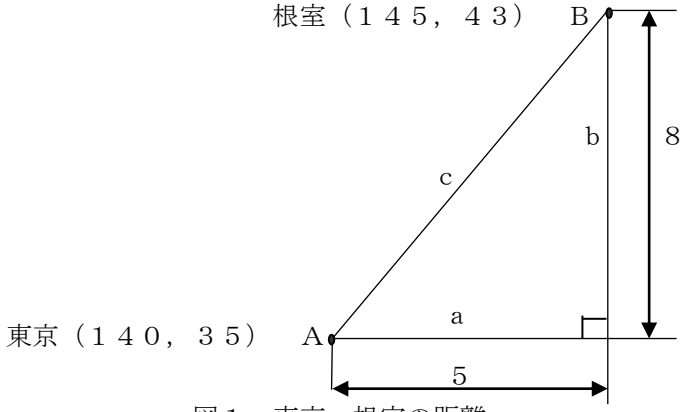

図１　東京－根室の距離

地球の中心からみるＡＢ間の角度ｃは、ａとｂと直角三角形の関係にあるから、三平方の定理からｃが求められる。

$$c = \sqrt{5^2 + 8^2} \fallingdotseq 9.43$$

このｃが地球の中心と、ＡＢそれぞれを結ぶ線の角度を示している。ＡＢ間を通る地球の円周上の、その角度分ｃの円弧が求める距離になるから、　$x = \pi r^2 \times c / 360$

地球の半径ｒ＝６，３７０ｋｍとすると、

ｘ＝１，０４８ｋｍ

となる。これは地図上で測っても近い値を示しているので、かなり正しい。

② 季節的な太陽高度

夜が明ける時間や日が暮れる時間が気になることがある。特に、外でうろうろしているとき、日暮れまであと何時間だろうか、と知りたくなる。そんなとき私は太陽の高さを見る。太陽を見れば、おおよその方角や時間がわかるから便利だ。秒や分の正確さは望めないけれど……。それがうまくできれば、個人的な特技になるだろう。

夜明けや日暮れの時間は、１年の周期で季節変動するし、地球所の緯度･経度によって、早い・遅いがある。同じ日本に住んでいても、東端の根室と西端の宮古島辺りでは、大きな差がある。地球は東に回っており、経度によって差があるのはもちろんだが、緯度の差によっても、その時間が変動する。緯度が高いほど、その変動が大きいことはよく知られている。

地球が太陽の周りを回る公転面に対して、北極を上にして自転している地軸が２３．５度ほど傾いていることに関係している。これによって季節が巡ってくるし、昼間の時間が変わってくるし、太陽の高さや、太陽が昇る方角も少しずつ変化する。

次の図２は、太陽の周りを回る地球のイメージ図で、春分･夏至、秋分･冬至のときの地球の位置関係を模式的に描きこんでいる。大きさや距離については正確ではない。地球が自転する地軸の向きに注目してほしい。地球の表面では、太陽公転面の内側に日が当たり、外側には日が当たらない。つまり、昼と夜になる。地球は自転しているから、昼と夜が交互に繰り返している。各季節においても、ゆるやかに公転しながら、その位置で自転している。

地軸は、太陽公転面の垂直から約２３．５度傾いている。なお、その軸がぶれる微妙な歳差（さいさ）運動があることも、頭のどこかに入れておきたい。周期は２万５８００年という。

地軸が太陽の逆向きに一番傾いているときが、冬至だ。北半球では、日の出が遅く、日の入りが早い。最も日が短くなる。正午における太陽の高さも、一番低くなる。寒い冬の季節だ。ただし、寒さ・暑さの気温のピークは、約一カ月遅れてやってくる。

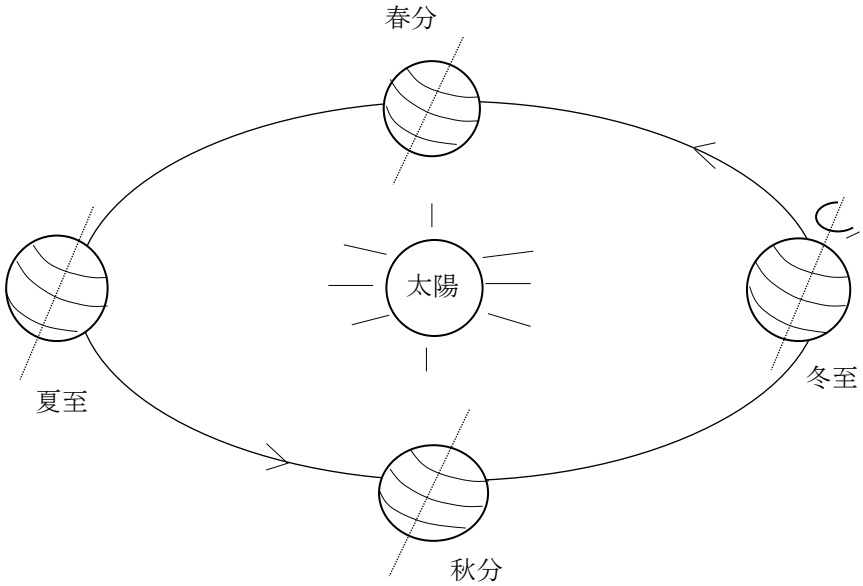

図２　太陽を回る地球

同じ経度にある複数の地点では、地軸の傾きが、太陽方向にどれだけ傾いているかによって、日の出・日の入り時間が変わる。つまり、日照時間について、それぞれ考察してみよう。
地球上の北緯についての基本を図示すると、

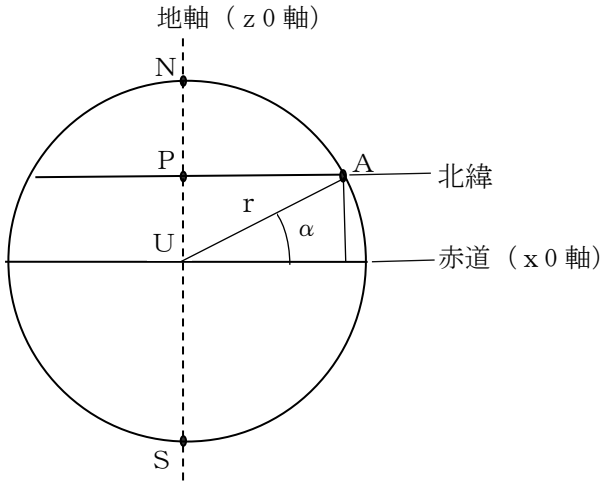

図３　北緯の概念

図３では、赤道をｘ０軸、地軸をｚ０軸とすれば、北緯は赤道面からの角度だから、Ａ点の座標は、（ｒ・ｃｏｓα，ｒ・ｓｉｎα）となる。北緯αの切り口は、Ｐ点を中心とする半径ｒ・ｃｏｓαの円形である。Ｐ点は、地球内部の中心点Ｕから、上方のｒ・ｓｉｎαの位置にある。北緯αの各地点は、Ｐを中心とする、半径ｒ・ｃｏｓαの円の上にある。なお、方位に関して、北緯上にある一点では、北極点Ｎに向かう方角が北であり、前後左右がそれぞれ北南西東となるのは、もちろんである。

図４は冬至のときの模式図である。地球が太陽を回る公転面を基準にし、太陽と地球の中心点 U を通る線を x 軸とする。U から天空へ垂直に延びる線を z 軸とする。冬至のとき、地球の地軸は x 軸方面に２３．５度傾いている。

太陽光は左方向から照射する。その光は、地球から見て限りなく遠いから、平行になっている。

この図のＡ１は、南中した正午の地点であり、Ｂ１は、真夜中の０時の地点である。z 軸の線（実際は面）を境に、北緯上（実際は円周）の地点が左側にあれば、太陽光が当たるから昼。右側にあれば、太陽光が当たらない夜である。

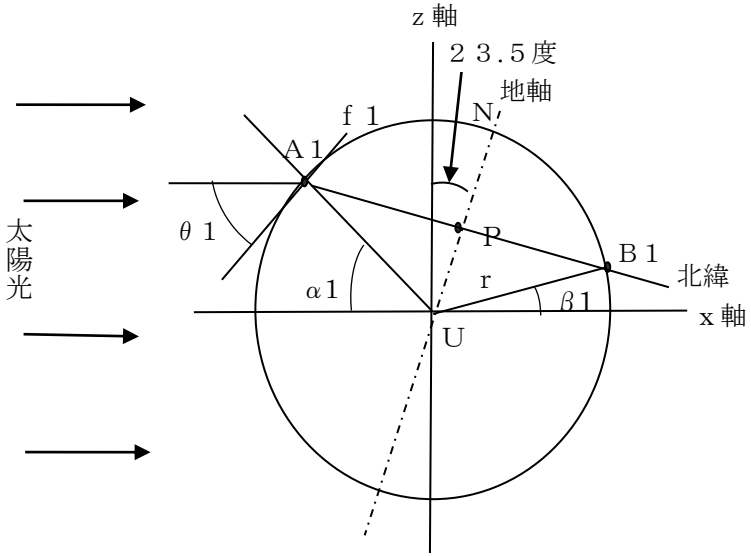

図４　冬至の太陽高度

Ａ１において、太陽高度は、つまりＡ１の地表面ｆ１から見る太陽の角度θ1は、θ1＝９０－α1

$\alpha 1 = \alpha + 23.5$　だから、$\theta 1 = 66.5 - \alpha$
$\alpha = 35$とすると、$\theta 1 = 31.5$
この角度では、太陽高度がそうとうに低い。
また、夏至の時は、地軸の向きはそのままで、地球は太陽の周りを半周するから、図５のように太陽光は右方向からさす。Ａ２が南中する正午の地点である。Ｂ２は、真夜中の０時の地点である。

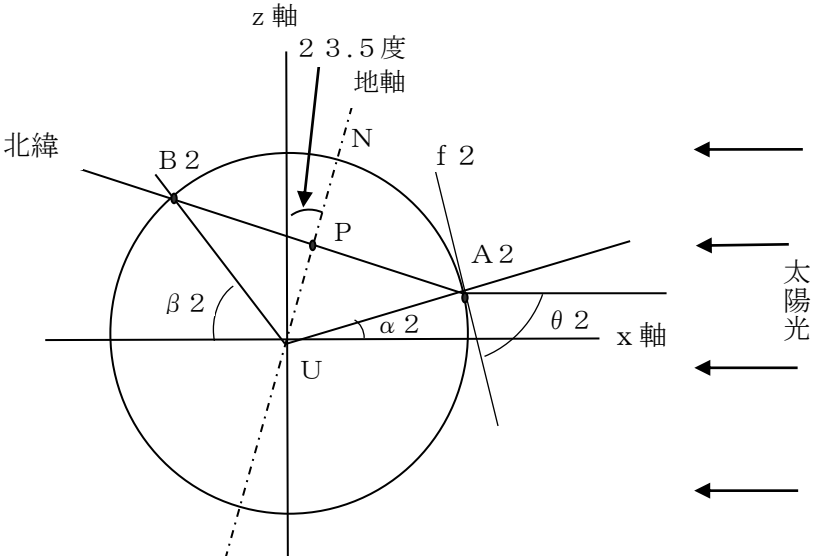

図５　夏至の太陽高度

Ａ２において、太陽高度は、つまりＡ２の地表面ｆ２から見る太陽の角度$\theta 2$は、$\theta 2 = 90 - \alpha 2$、
$\alpha 2 = \alpha - 23.5$　だから、$\theta 2 = 113.5 - \alpha$
$\alpha = 35$とすると、$\theta 2 = 78.5$
これで太陽高度が高いことがわかる。その地表に立つ人にとって、感覚的に「真上（まうえ）に太陽が昇る」ようだ。

③ 季節の日照時間

図６以下は、冬至での地球を縦から（天空から）見た平面図である。公転面にあって地球の中心Ｕを通り、ｘ軸に直角である軸をｙ軸とする。この図でｙ軸の左側が、太陽光が当たるから昼間、右側が夜となる。地球は球体だから、どこから見ても円形だが、傾きながら、左回転している。

北極点Ｎは、その傾きにより、ｘ軸方向に位置がある。北緯も２３．５度傾いている円だから、その円の中心点Ｐはｘ軸方向にやや位置を移している。天空から見ると、円周のＰからの距離は、ｘ軸方向がｙ軸方向よりやや短くなるから、楕円形になる。
Ｃ１は日の出の地点、Ｄ１は日の入りの地点となる。Ｃ１－Ｄ１間の円弧が昼間であり、回転角度γ１であらわす。自転の時間に比例する。図でみるとおり、

昼γ１＜夜（３６０－γ１）

であるから、昼の時間が短いことがわかる。一時間当たりの回転角度は、もちろん３６０÷２４であるから、時間が計算できるが、詳細は省略する。

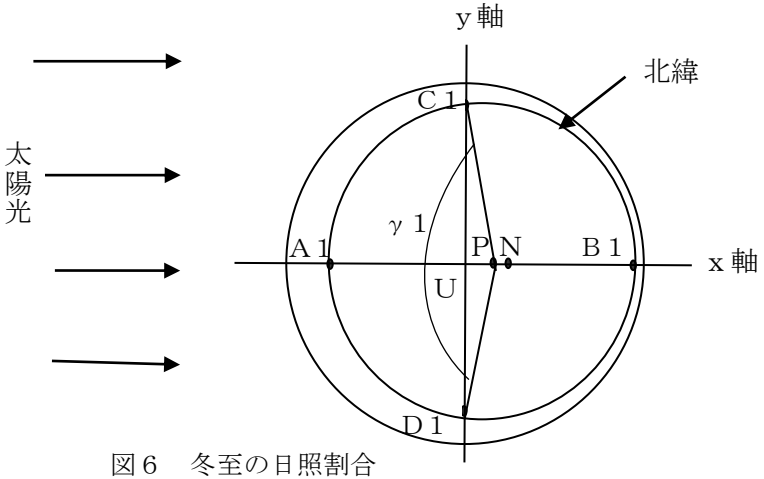

図６　冬至の日照割合

Ａ１～Ｄ１の時間が短いことは、ことわざに「秋の日は釣瓶落とし」というように、実際に日の沈むのが早いことを示している。

夏至については、太陽光が右向きになり、昼夜逆になると考えればよいので、省略する。

次に春分を考える。やはり、地球を縦から（天空の上から）見た平面図を図７で示す。太陽光は、図の下から上に射す。
Ｃ３～Ｄ３までの日照時間γ3は、１８０度、ちょうど半日（１２時間）であることがわかる。南中点Ａ３で、太陽高度が最高点になる。その方向については、真南ではなく、地軸の傾き分を補正する必要がある。すると、２３．５度東寄りの方角で太陽高度が最も高くなる。つまり、南中点Ａ３に人が立つと、Ｎ方向よりやや西寄りに影が映ることになる。

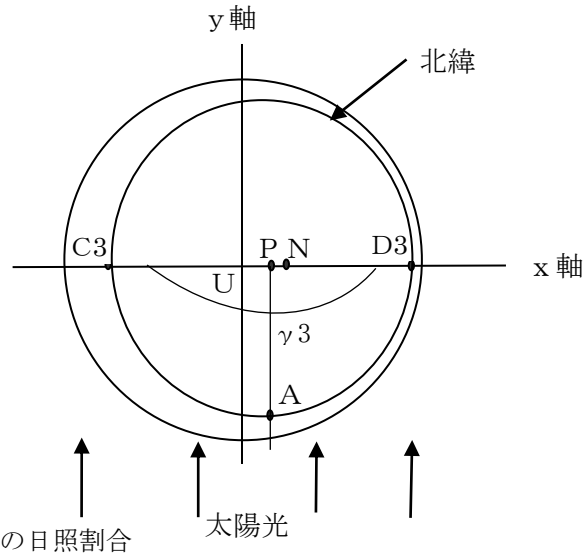

図７　春分の日照割合

同様に秋分を考える。地球を縦から（天空から）見た平面図を図８で示す。やはり、春分とは左右逆の図となる。南中点Ａ４に立つ人の影は、やや東寄りに映る。

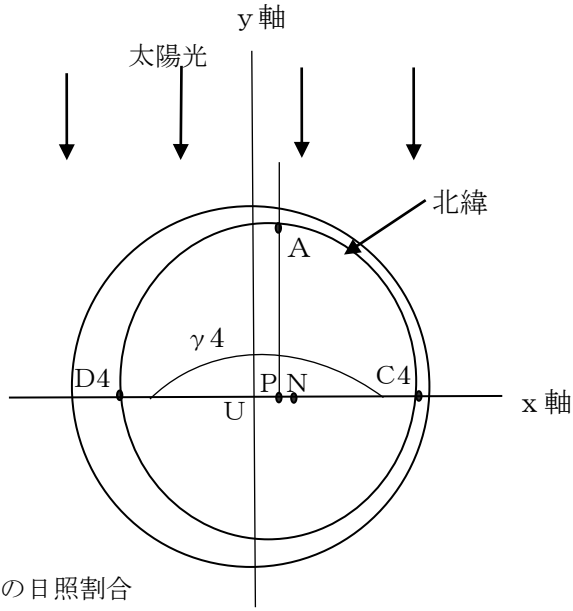

図８　秋分の日照割合